小説　俺のきらいなもの

俺は弁当の時間が耐えられない。

ついこの間までは、とても幸せだった。弁当を開けて、つまらない授業で消耗し切った身体に、栄養をたっぷり補充する至福の時間。

唐揚げもいい。卵焼きもいい。たまにゆで卵になるともっといい。サラダも美味しい。今日のサラダはレタスだけか。酢豚があるのでまあ良しか。並んだおかずと対話しながら食べる弁当は疲れた心まで癒してくれた。

それもみな、コロナのお蔭だ。ソーシャルディスタンスを取るため、飛沫が飛ばないようにするため、感染予防のためと称して、俺たちのコミュニケーションは遮断された。それは俺にとって、どれほど安らぎであったことか。

授業中のペアワークも制限された。教室では、いつも生徒たちはじっと前を向いていることを強要され、大きな声をあげることも禁じられた。マスクで顔をすっぽりと覆った生徒ほど優秀な生徒とみなされた。鼻出しをしようものなら、犯罪者のような目で見られ、注意された。俺たちは顔の面積のほんの少しの部分で他者を認識することになったが、それは簡単には記憶にとどまらず、クラスメートの顔と名前が一致しないのは当然のことなった。たまにクラス写真を撮るといって、一時的にマスクをはずすように強制された時の違和感は半端なかったし、できればはずしたくなかった。マスクなしの集合写真がクラスに掲示されたときは、一体そこに写っているのが誰の顔かもわからなかったし、知らない顔が並んでいる中に緊張した自分の顔があるのは不気味ですらあった。

そのように俺は、静かに教室に生息し、安穏な日々を過ごしていた。予習をしていなくても、授業中に指名されて発言する機会もなかったし、勉強について行けなくても、皆の前で恥をかくこともなかった。

たまに休みたい日は「熱があります」と伝えると、学校側は丁重に「出席停止」として扱ってくれた。俺の欠席はどこにも痕跡が残らない。俺は月に数回は「出席停止」で休むようになった。

休んだ日はスマホに没頭し、一日中何もせずに優雅に過ごした。さすがにリビングに出ていくと親がうるさいから、自分の部屋に籠りがちになった。やがて俺の成績は落ちていき、しまいには最小限の点数すら取れなくな

っていった。そんな成績でも進級はできた。どうやら仮進級というやつで、追試を受けなければならなくなった。
それでも俺は、どうにかなるんじゃないかと軽く考えていた。
ところが、新学期になって学校は一変した。出席停止になるには、保護者が学校に相談し、校長が合理的に出席停止になると判断した場合だという文書が来た。母親は、俺の代わりに「発熱です」という嘘の電話を学校に入れるのを拒否した。とりあえず出席した方がよさそうだということぐらい俺にもわかった。
授業では、積極的にペアワークやグループワークが取り入れられるようになった。皆が話している内容が俺には理解できない。どうして皆はコロナの状況で勉強を怠らなかったのか。あんなに怠惰な生活が送れる環境だったのに。俺の方がおかしいのか。皆が狂っているのか。
しかも、マスクは取ってもいいということになった。最初は皆、取るのを躊躇していた。ずっとつけていたいと女子生徒たちが話しているのを耳にして、しめしめと思っていた。皆がマスクをはずすまでには時間がかかりそうだ。ところが、次第にマスクをはずす生徒は増え始めた。熱さのせいもあるだろうが、俺の想定よりも遥かに早い。早すぎる。どうしてはずすんだ。みんな、人前で顔をさらして恥ずかしくないのか。
追試の結果が出た。すべてに合格するのは無理だった。簡単なテストであることは俺にもわかった。学校が何とか進級をさせてくれようとしていることも理解できた。だが、俺の学力はそれをも下回るものになってしまっていた。
俺は朝学校に行こうとすると、身体がだるくて起き上がれなくなった。無理に起きるのだが、頭が痛い。家を出ようとすると腹痛に襲われ、トイレにかけこむ。トイレに籠っている間に、電車の時間に間に合わなくなる。遅刻して行くのは嫌だ。俺は目立つのが嫌なんだ。教室に入ったときに向けられる皆の眼が怖い。とうとう学校を休む。
久しぶりに学校に行ったら、数名ずつがグループになって弁当を食べていた。机をひつけあっている。適当な距離さえとれば、一緒に食べることも許されるという。どうしてなんだ。俺は孤独だと思われたくない。かといって、自分から誘いかけるのは嫌だ。誰か俺を誘ってくれ。俺は弁当を前に立ち尽くす。俺に声をかける奴はいない。俺はどうしたらいいんだ。